

建交労鉄道
2026年6月16日
NO202号
発行責任者
須藤清成



「鈴の音と子どもの笑顔が教えてくれたもの」
今も世界では戦争が続く、日本でも憲法9条をめぐる議論がある。馬上の子どもたち、沿道で「かわいい」と声をかける子どもたちを見てみると、戦争のない平和な世界の尊さをあらためて感じた。

初夏の風物詩・チャグチャグ馬コを、今年も可愛い子どもたちの写真を撮りたくて見に行ってきた。
鈴の音が運ぶ、平和への想
華やかな装束をまとった馬が歩くたびに「チャグチャグ」と鈴が鳴り、蹄の音と重なって独特のリズムをつくる。人出も多く、少し興奮したのか、一頭の馬が大きくないな気がしたが、その後は落ち着いたようで鳴き声は聞こえなくなってきた。カメラを向けると、花笠の下からかわいく化粧した子どもが笑顔で手を振ってくれた。中には少し眠そうなお子もいて心配になったが、鞍から落ちないようにしっかりとした仕掛けが施されているようだ。

戦争のない世界を願いながら見た馬コの行列

「チャグチャグ馬コ」が聞こえてくる。
「伝統の唄に乗せて『ウーン』を即座に回収する、世界一縁起のいいフィナーレだった。」

日本が
これからも
戦争しない
ために



「平和憲法」
をみんな
で
守ろう

人間が健康に生きて行く為に 190

安全な水道水を飲みたい (食べも通信より)

水道水をそのまま飲める国は世界でも10カ国前後しかなく、日本の水道水は安全でおいしいと高く評価されてきました。しかし近年、PFAS (ピーファス、有機フッ素化合物) 汚染が深刻化し、水源の取水停止も増えています。今年4月1日にはPFOS (ピーフォス) とPFOA (ピーフォア) の水質基準の順守が義務化されましたが、その基準値は諸外国と比較すると非常に緩く、基準値の改定を求める住民運動も広がっています。水道事業の民間委託が進むなかで、自治体直営で安全性がどう守られているのか、PFASの基準値の問題点と汚染実態について考えます。

日本の水道普及率は世界トップクラスであり、蛇口からそのまま水が飲める環境が整っています。その中で埼玉県営水道では、24時間365日体制で水質測定器による監視を行い、法令に基づいた定期的な水質検査を徹底して実施しています。特に重視されているのが「直営体制」での運用です。現場で働く職員が直接管理を担うことで、検査担当者の職能を高めています。これにより、過去に利根川水系で有害物質 (ヘキサメチレンテトラミン) が流出し、水道水にホルムアルデヒドが生成されるリスクが生じた事故の際にも、迅速に検査体制を整えて事故状況を早期に把握するなど、高い即応性を発揮することができました。

日本の水道水に含まれるPFAS (有機フッ素化合物) の基準値は50ng/Lと欧米より大幅に緩く、健康への影響や最新の科学的知見が十分に反映されていません。 市民団体は基準値の引き下げと対策強化を求めて活動しています。最新の研究では、PFASの低濃度暴露でも健康リスクがあることが示されており、特に子どもや妊婦などへの影響が懸念されています。欧米諸国はこうした知見を基準値に反映していますが、日本ではまだ十分に反映されていないため、基準値の見直しと対策強化が求められています。

ペットボトル飲料における3つの主な問題点。 ①マイクロ・ナノプラスチックの溶出—米国の大学の研究によると、ペットボトル水1リットルあたりから約24万個もの微細なプラスチック粒子が検出されています。これらは細胞のなかにまで入り込む可能性があり、近年の人体汚染の大きな原因の一つとして懸念されています。②長期間の保存や高温による化学物質の溶出—ペットボトルを暑い場所に長時間放置すると、製造時に使用された有害な化学物質が溶け出す恐れがあります。ある実験では、熱分解によって発がん性が疑われる物質 (アセトアルデヒドなど) が水道水よりも高い濃度で検出されています。③リサイクルボトルからの有害物質の溶出—現在市販されているペットボトルの多くにリサイクル樹脂が使われていますが、これらは新品 (バージン) のボトルに比べて有害物質が溶け出しやすい性質があります。海外の研究では、リサイクルペットボトルから約150種類もの化学物質が飲料水中に溶け出していることが判明しています。

原発ゼロ NO180

事故発生時の被害が甚大
原子力発電所は厳重な安全対策が取られているものの、事故が一度発生すると、その被害は広範囲に及び、甚大なものとなります。
放射性物質の拡散: 放射性物質が外部に漏れ出すと、周辺の環境が広範囲にわたって汚染されます。
健康被害: 放射能汚染は、住民の深刻な健康被害を引き起こす可能性があります。
長期にわたる影響: 汚染された地域の除

染は非常に難しく、元に戻すには長い年月と多額の費用が必要となります。
大規模災害への脆弱性: 地震や津波といった大規模な自然災害に弱く、福島原発事故はその危険性を改めて示しました。
放射性廃棄物の最終処分
原子力発電に伴い、強い放射能を持つ使用済み核燃料などの「高レベル放射性廃棄物」が発生します。

長期間の危険性: これらの廃棄物は放射能レベルが非常に高く、無害化するには数万年という気の遠くなるような時間を要します。
最終処分地の未定: 発生から半世紀以上経っても、世界的に高レベル放射性廃棄物の安全かつ恒久的な最終処分方法は確立されておらず、最終的な処分場所も決まっていません。
高コスト
原子力

発電所の建設には莫大な費用がかかる上、運転や維持管理にも高額のコストが発生します。
建設費
新しい原子炉の建設は、多額の初期投資が必要です。
維持・安全対策費
事故のリスクに備えるための安全対策や厳重な管理体制の維持にも、多額の費用がかかります。
廃炉費用
運転を終えた後の廃炉作業

も、多大なコストと長い期間を要します。
核兵器転用のリスク
原子力発電で用いる技術や核物質は、核兵器開発に転用されるリスクと常に隣り合わせです。
核拡散のリスク: 原子力技術を持つ国が増えることは、核兵器を持つ国が増えること、核兵器を増やす国が増える可能性を高めます。テロの脅威: 核物質がテロリストの手に渡る可能性も懸念されます。

れていきます。
ウラン資源の枯渇
ウランは再生可能エネルギーとは異なり、いつか枯渇する有限な資源です。
資源依存: 日本のようにエネルギー資源が少ない国にとって、海外からのウラン輸入に依存することになります。
ウラン採掘の環境負荷: ウランの採掘は、周辺環境を汚染するリスクがあります。

